

北国に生きる～雪氷圏の海、生活、歴史を学ぶ～

日時：12月8日(土) 13:20～16:20
会場：函館市民会館

～ プログラム ～

開会挨拶 (13:20～13:25)

【講演】北国の冬の雪氷環境と私たちの生活～自然と人の共生を考える～ (13:25～14:15)

秋田谷英次 氏 NPO法人雪氷ネットワーク(北の生活館館長)

あらゆる生物は地球の自然の中でしか生きていけない。自然が壊れたら人類は生存できない。現代社会は科学技術の発展で物質的に豊かになったが、一方では戦争、自然破壊、温暖化・公害も急速に拡大してきた。自動車が普及するにつれ、雪道を夏と同じように高速で走るためにスパイクタイヤが普及した。その結果、雪道でもスリップせずに走れるようになったが、粉じんが大気汚染や健康被害をもたらしたため、全面禁止となった。

いくら除雪をしても、夏のような道路状態を維持するのは難しい。除雪機械の充実、ロードヒーティング、凍結防止剤の散布は勿論有効だが、費用と環境への影響を考えると、おのずから限界があるはずだ。冬は雪が降るのは当然なのだから、雪との共生が叫ばれ、雪のマイナス面だけでなく、プラス面をも注目するようになってきた。その一つが親雪である。雪を楽しむ、雪と遊ぶ、雪に親しむこと、これらも雪との共生である。雪を観光資源や自然体験の題材として人々が集い、雪国特有の文化や生活の知恵を生かした「雪との共生」を実現したい。

一休憩一 (14:15～14:25)

【講演】亜寒帯の海洋環境と生物生産～北の海が育む海の幸～ (14:25～15:15)

齊藤誠一 氏 北海道大学大学院水産科学研究院 教授

オホーツク海やベーリング海は亜寒帯海域の縁辺海のひとつである。これらの海を特徴付けるのは、季節海氷(冬季のみの海氷)の存在である。この季節海氷は、オホーツク海では沿岸域に接岸・離岸して海上を漂って、流氷と呼ばれる。この流氷が、どのように生物生産に寄与しているか、オホーツク海の地まきホタテガイ漁場を例に取り上げる。オホーツク海の地まきホタテガイ漁業では、貝の小型化や年々の成長の差が問題になっている。海洋環境がこの成長にどのように影響を与えているのかを理解するには、ホタテガイ漁場の基礎生産過程やそれにおよぼす海氷分布を空間的にかつ時系列でモニタリングする必要がある。ここでは、衛星による観測データを用いて、オホーツク海南西部における植物プランクトン分布、海氷分布が、どのようにホタテガイの成長に影響をおよぼしているか解説し、北の海がどのように海の幸を育むかを浮き彫りにする。

【講演】文明開化のサクセス・ストーリー～函館氷の誕生～ (15:15～16:05)

猪上徳雄 氏 函館短期大学 教授

明治初期、日本では食や医療に大きな転換期が訪れました。特に肉食の解禁による食の洋食化、医療の進歩などがあります。それらに伴い食肉の腐敗抑制や体を冷やすことの重要性の普及のために良質の氷が求められるようになりました。そこに注目した一人の日本人がいました。多くの苦難と国際競争に打ち勝って、米業を一大事業にまで押し上げた中川嘉兵衛が、その人です。なんと、良質で安い国産氷の普及を図りたいとして販売競争、自然との闘い、資金難を克服し、事業を成功に導いた功績は大きい。これによって、日本における肉食の一般への普及、医療分野での氷の重要性の認識、さらには「函館氷」として氷のブランド化による函館の名前を全国に広げることに貢献しました。東京から箱館まで郵便が届くのに約30日を要した明治初期に、なぜ函館の地でこの文明開化のサクセス・ストーリーが可能だったのかを振り返ってみる。

質疑 (16:05～16:15)

閉会挨拶 (16:15～16:20)